

## A Song for Every Season (6)

湯山健一

### 【11月】

「さて、収穫も終わると天候も傾いてくるが、  
 お次はいつもの脱穀屋に頼んで、刈った小麦の脱穀だ。  
 殻から竿さおの持ち手を握り [訳者補記 結わえた] 対の棒を振り上げて叩き付ける、  
 来年も収穫を終えてこんな風にみんなで顔を合わせられますように」。  
 「鋤の刃の誇り (The Ploughshare)」

空が鼠ねずみいろ色に染まり、日の短くなる11月には、海峡を吹く強い風が餌を求め  
 る鳥たちを陸へと追い立て、南西の方角からは絶え間なく雨が降り込みます。  
 村はがらんと人気がなく、生ひと気けの感じられないその姿は、あたかも冬眠に入っ  
 てしまったかのようです。古来そびえる海岸線の岸壁に絶えず打ち付ける山  
 なりの高波で空中に吹き飛ばされた小石や海藻の小さな欠片がそこかしこに  
 散らばって、ハイ・ストリートはまるで廃墟です。どうしても出かけなけれ  
 ばならない用事のある人たちだけが外にいましたが、皆一様にコートの襟を  
 肩口から引き寄せて、「いい加減に収まりやがれ！」と強風への不満を口に  
 しながら、風に抗い斜めになって歩いていました。嵐の猛威にすら持ち堪え  
 た村の [訳者補記 真ん中にある] 池にさえ、さざ波が立って草の生い茂る堤に打  
 ち付けます。池の畔には、悪天候などお構いなしの幼い男の子たちが学校帰  
 りに立ち寄って、足を濡らせば親に叱られるかも知れないのに、池に浮いた  
 枯れ葉やゴミのなかから、落ちた「柝の実 (conkers) [訳注 ぶつけて相手の  
 実を割る子どもの遊びに使われていた。]」を拾い上げようと手を伸ばしてい

ました。農場の鼓動も同じように速度を落とし、ゆっくりと完全に落ち着いていました。屋外での作業の気配も痕跡もほとんど見当たらず、ただ脱穀作業中の納屋から聞こえてくる穀竿を麦束に叩き付けるバサッパサッという規則的な音だけが、農作業は屋内で依然続いていて、農場の心臓が今も脈打っていることを証していました。

かつて、穀竿による脱穀については、どの納屋にも毎年同じ人物が派遣されるのが常で、必要に応じて時々で手伝いの人員を入れながら、冬の大半を費やして作業が行われました。そのため、納屋は脱穀を任される人物の名を冠して呼ばれることがよくありました。例えば、現在はボウリング (bowling) [訳註 lawn bowls というボーリングの原型となった競技] 専用の芝地になっている場所の向かいにある、チャルナーズ農場の主納屋 (Home Barn) は、何人かいる長年脱穀を務めてきた人物のうちひとりの名を取って「ドラマー納屋 (Drummer's Barn)」と今でも呼ばれています。もともと、主納屋の建物自体は何年か前に改装されて現在は住宅になっていますけれどね。穀竿は、脱穀屋が自分でこしらえるものでした。通常、持ち手になる方は、ハシバミをきっちりまっすぐに切り出した竿で、もう一方の [訳者補記 紐で結わえて] 対になるスウィングル (swingle) [訳註 Sussex では swingel と綴る。] にはヒイラギを用いました。[訳者補記 2本の棒を繋ぎ合わせるための] スイベル・キャップ (swivel cap) にはビロードトネリコの木材から切り出した小さな板を沸騰したやかんの蒸気で蒸して曲げ、形を整えて作りまし、スウィングルをスイベルに縛り付ける組紐 (knit band) は、革の紐か、ときには乾燥させたウナギの皮 (eel-skin) [訳註 近辺に大きな川のない地勢に鑑みれば、海で捕れる大型のアナゴの皮であった可能性が高い。] で作りまし。

穀竿を使った脱穀は、埃まみれになる過酷な作業でしたから、ほぼ全員が、[訳者補記 縁の無い頭にぴったりの] 頭蓋帽 (skull cap) か、タモシャンター (tam o'shanter) [訳註 スコットランド起源の大きめのベレー帽] を被って頭を埃から守っていました。それに、穀竿はなかなか扱いの難しい道具でした。スウィ

ングルがどんな動きをするか想定が難しいばかりでなく、紐が絡まったりスィベルが固まったりすると、ほぼ間違いなく自分の頭を強打するという事態に陥ったからです。父はこんな風に残っています。「もし紐が真つ二つに切れてみろよ。後ろからスウィンジユル (swinjul) [訳註 = swingel = swingle] がすっ飛んできて、テメえの後頭部を直撃よ」。

脱穀屋には見習いの小僧たちが付いて、藁束を作ったり、籾殻を吹き飛ばしたり (wimming) [訳註 = winnowing (Sussex dialect)] と、作業の補助をしていました。藁束作りには、ねじ錐 (wimble) を使いましたが、これは、鍵の手に曲がった回転軸を備え、端にフックの付いた、ちょうど [訳者補記—昔前に] 自動車のエンジンをかけるときに使っていた道具によく似た形状のものでした。脱穀屋が [訳者補記作業の済んだ] 麦藁を放り投げると、納屋の床の上に [訳者補記脱穀屋を取り囲むように] 麦藁の輪が出来、これに少年たちがフックをかけて後方へ掻き集めます。同時にねじ錐のハンドルを繰り返していくと捻られた藁で綱や縄が出来ていきます。籾殻を吹き飛ばす作業は、特許を取得した画期的な手動式の機械を用いて行われていました。脱穀された籾を木製の大きなスコップですくい上げ、この機械のなかへ放り込むと、篩ふるいと風車を組み合わせた内部の機構によって、籾殻や、籾の周りの短い穂や藁など (cavings) [訳註 = short straws or ears (Sussex dialect)] が籾から切り分けられます。この種の機械が導入される前は、もっと原始的な手法がとられていました。納屋には必ず向かい合う両面に大きな扉が設えてありましたが、この扉を両面とも大きく押し広げて、納屋のなか全体に風を通します。そして、風下に3フィートほどの高さの木製の板を数枚並べて出口を塞ぎ、その下に6インチほどの隙間を設けて下から風が抜けるようにします。こうしておいて、戸口近辺の床の上に満遍なく籾を撒き広げますと、[訳者補記並んだ板に堰き止められて] 勢いを増した風が、籾殻や籾の周りの短い穂や藁などを吹き飛ばし、板の下の隙間から外へと出してくれるのです。籾は殻や藁より重いので、吹き飛ばされずに戸口のところで食い止められる

(held) という仕組みでした。「脱穀 (thresh)」がかつて実際にこのようなやり方で行われていたことから、私たちは戸口のことを「敷居・<sup>しきみ</sup> 閾・<sup>けはな</sup> 蹴放し (threshold)」と呼ぶようになったのかも知れませんね。

[<sup>訳者補記</sup>20世紀初頭] 当時、オート麦の脱穀にはまだ原始的な穀竿が用いられていましたが、穀類の大半を占める小麦や大麦は、蒸気機関か馬を動力とした機械で脱穀を行っていました。コート農場には蒸気機関式のものが入り込んでいました。

父はこう記しています。

前にも書いたとおり、雨の日にもよっぽと脱穀をやったもので、納屋は野郎どもで溢れてた。この作業に納屋を2つあてがって、片方にゃ蒸気機関の脱穀機、もう片方には馬4頭に曳かせる機械が据えてあった。蒸気機関の脱穀機だと一日に藁山ひとつ分やつつけられた。藁束を束ねんの男が6人雇われてたな。エイヴィス、ウェイル、フォッジ、ドラマー、シャーティにビル・ハーンさ。藁束ひとつにつき半ペニーっていう出来高払いで、アイツら働いてた。日によっちゃ120束も作ってやがったから、一日でちょうど5シリングだわな。他の仕事は日雇いさ。3人は干し草作り、ひとりは藁の運び出し、ひとりは袋の片づけ、<sup>[<sup>訳者補記</sup>機械]</sup>に麦束を投げ込む] フィーダー (feeder) にひとり、投げ込む前に麦束の紐を解くのがひとり、それから小僧が、ひとりは籾殻やら藁の切れ端の片づけと、もうひとりが機械の操作だ。だから、ぜんぶで大人が13人と小僧が2人だな。

「フィーダー」とは、機械の一番高いところに登って、結束紐を切ってバラバラになった麦束ひとつ分ずつを腕の上から均等に前の台に落とし、これを機械のなかの円筒状の容器のなかに入れていく仕事で、麦を束になって固まった状態で一度に放り込まないよう、均しながら着実に機械のなかへ流し込めることが、この役を任される者の誇りでした。これが続けられている限り、機械音は音程の高いところで一定に保たれました。もし麦束ひとつ分をまと

めて投げ込み、急激に負荷が高まったりすると、処理速度が落ち、1音から2音分、音程も低くなりました。ですから、「そのガラクタで曲が弾けるんじゃないか」なんて言う人もあったようです。

チャルナーズ農場では馬に曳かせる機械を使っていました。納屋の裏手に、長さが25フィートほどもありそうな木製の梁材を2本、水平に、まるで風車の羽根のように十字に組み合わせた器具が据えられ、馬4頭が十字の4つの端それぞれに引き具を付けて繋がれていました。十字の中心の上には箱が組まれていて、そのなかに、この任に当たる馬方が、まるでサーカスの団長のように<sup>ながむち</sup>長鞭を持って立ち、4頭が一定の速度で歩いて回るよう目を配っていました。この動力で歯車が回り、納屋の壁に空けられた穴を突き抜けて長く伸びた主軸を介して中の脱穀機へ力が伝わります。もちろん、処理速度という点からすると、蒸気機関式の脱穀機に遠く及ぶものではありませんでした。

馬の曳く脱穀機だと一山片づけるのに最短でも2日はかかった。これだと藁を束ねるのに4人、これも同じく一束半ペニーっていう出来高払いで、日に80束だったから、1日で3シリング4ペンスの稼ぎだな。あとは、日雇いで干し草作りにふたり、藁運びにひとり、籾殻やら藁の切れ端を片づけるのにひとり、フィーダーがひとり、馬の面倒を見るのがひとり、麦束を括った紐を切って解く小僧がひとり。ぜんぶで男10人と小僧がひとりよ。

馬に曳かせる脱穀機は相当昔に発明されたものでしょうし、農場への導入が何十年、何百年も前のことだと示す証拠を探ったところで何も出てきませんから諦めた方が良いでしょうね。1830年代、イングランドの他の地域では、農夫たちが、冬場に納屋で行われる脱穀の仕事を機械に奪われてしまうのではないかと危機感を募らせ、このままでは自分たちの生活が脅かされてしまうという思いから暴徒と化し、脱穀機を破壊する暴動が随分と蔓延ったようですが、この辺りでは皆無でした。こうした他の地域での暴動を尻目に、

当時農場に導入された脱穀機を初めて目の当たりにした [訳者補記 この地域の] 農夫たちの子や孫の世代は、今もこんな歌を唄っています。ここにははつきり機械の導入を歓迎する様子が唄われていて、これに反対するような雰囲気は微塵も感じられません。

やったぜ、機械のお出ました  
小麦も大麦も、ぜんぶきれいに脱穀してくれる、  
脱穀だけじゃねえぜ、殻も飛ばしてすぐ売りもんになっちまう、  
あとは勇んで、いざ市場へ向かうだけ、

ガラガラガラガラ唄わせて、メアリー\*<sup>1</sup>を励まし焚きつけて  
見慣れた台の上の麦をどンドン放り込んでいくぜ。

コイツを作ったヤツはすげえぜ。ほんと、よく出来てる、  
歯車も円盤も、どれもこれもきっちり応えて仕事してやがる。  
デケえ円盤が回れば小せえ輪っかが鼻歌で応じ、  
ドラムの上に腰掛けて、フィーダーがなかへ麦を放り込んでいく、  
ガラガラガラガラ唄わせて、メアリーを励まし焚きつけて  
見慣れた台の上の麦をどンドン放り込んでいくぜ。

ハワードのおやじさんが麦束を運び込めば、  
おばさんもそれに続く。  
メアリーはじっと腰を下ろしたまま、日がな一日、働き続け、  
済んだ藁をジョニーが抱えて運んでいくぜ、

ガラガラガラガラ唄わせて、メアリーを励まし焚きつけて  
見慣れた台の上の麦をどンドン放り込んでいくぜ\*<sup>2</sup>。

訳注\*<sup>1</sup> 文字通りには、機械を操作する Mary という名の若い女性を激励するような行であるけれど、Jon Dudley 氏によれば、Copper family のなかでは然したる意味の無いコーラスとして唄われてい

るとのこと。

<sup>訳注\*2</sup>「懐かしの脱穀の歌 (Old Threshing Song)」の一節。Copper family が歌い継ぐレパートリーのひとつ。

このように機械化は進みましたが、実際のところ、当時まだ農場での脱穀は多くの部分が手作業で行われていましたので、冬を通して農夫たちがこれを請け負っていました。

冬場に行われるもうひとつの大仕事は、霜の降りていない日を選んで行われる鋤引きでした。春を迎えるまでに、16台の鋤で1,000エーカー以上ある肥沃な耕地の土を起しておかなければなりません。どれもサセックスに古くから伝わる、溝を1本ずつしか掘って行くことの出来ない木製の脱着型の鋤 (turn-wrist plough) [<sup>訳注</sup>発音は turn-rice plough に近く、そのように綴られることもある。現在は turnwrest plough の表記が通常。撥土板が取り外し可能であるため、畑の端で付け替えれば畝の反対側にも溝を掘ることが出来る。隣州 Kent にも同様のものが見られる。] で、父曰く、1日頑張って1台1エーカーというのがせいぜいだったそうですから、これは本当にとてつもない作業でした。父はあるとき、ソルトディーンの谷の上手の方で、これら16組が一斉に鋤をかける姿を見たことがあるのだそうです。14台は馬2頭ないし3頭が曳いていて、残りの2台は、それぞれ去勢した雄牛8頭を1組として鋤を曳かせていたそうです。父は、自分が [<sup>訳者補記</sup>馬方見習いの] 小僧として初めて鋤引きの手伝いに行ったときのことも話してくれたことがありました。当時まだ14歳だった父は、ソルトディーンの沿岸警備隊の畑に、 [<sup>訳者補記</sup>親方が面倒を見ていた体格の大きな荷馬車馬4頭のうち] プリンズとスワロウを連れて行くように言われたそうです。警備隊が詰め所としている田舎家の立ち並ぶ、その裏手の丘の麓に広がる耕地 (laine) [<sup>訳注</sup>Sussex dialect] で、広さが26エーカーほどありました。そこからは、谷の上手に他の隊が鋤を曳く姿が一望でき、父はついに一人前の男として働けることが

嬉しくまた誇らしかったそうです。

よく晴れた朝で、海風がやや強めに吹き込んでいました。9時頃になると、西の空に「使いの者たち (messengers) [訳註 Sussex dialect]」が姿を現し始めました。こう呼ばれていたのは、ふわふわした白い小さな雲の一群で、ときには風が雨の予兆を知らせるより先に現れることもありました。案の定、お昼頃にはもう灰色の雲が空を完全に埋め尽くしてしまっていました。そしてついに、沖合から雨の襲来です。一人またひとりと、他の馬方たちは、とぼとぼ家路につきましたが、自分の持ち場は必ず耕し終えると心に決めていた父は、そのまま作業を続けました。たったひとりで畑に残り、父は最後までその日の仕事をやり遂げたのでした。終わる頃にはもう身体はびしょ濡れでした。家に帰ると、なんてバカなことをと祖父に叱り飛ばされましたが、父は気にも留めなかったようです。初めて自分の手で1エーカーの畑を耕したことが何にも増して誇らしく、その達成感で気持ちが昂っていたのでした。「まあいい」。息子の頑張りを褒めてやりたい思いが祖父の心のなかにあつたことは想像に難くありません。それをなんとか押し殺して、祖父は、「じきにわかる」と言ったそうです。

【訳者補記 北東約5マイルほどの】近隣に位置する州都ルイス (Lewes) では、古くから町を挙げて11月5日を毎年盛大に祝ってきました。もしかするとこれに感化されたのかも知れませんが、私たちの村でも、誰しもがこの日が来るのを熱狂的に「心待ちにして (remembered)」いました。若者たちを中心とした行列が、ナフタリンに火を点したトーチを手に高く掲げて村中を練り歩きます。歌を口ずさみ、叫び声を上げ、玄関のドアを叩き、ベルを鳴らしながら、上機嫌の一団は行進を続けます。目映い炎の光と、爆竹やチャイニーズ・クラッカー、そして何より爆音をまき散らすことで地元では知らぬ者のなかった「ルイス・ラウザーズ (Lewes Rousers)」の鳴らす激しい爆発音が、黒いベルベットのように柔らかな夜の帳を切り裂いていきました。行進しながら、時折彼らは声を合わせて大きな声で唱えます。

「いいかい、いいかい、11月5日を忘れちゃいけないぜ  
あの火薬陰謀事件の起こった日さ、  
忘れちゃならない、あの火薬を使った反逆を  
絶対に心に刻んでおくことだ。  
ガイ・フォークス、そうさ、あいつの悪巧みさ  
王と議会をまるごと吹き飛ばそうとしたんだ  
地下に火薬を80樽も持ち込んで  
オレたちのイングランドを吹き飛ばし、転覆させようとしたのさ。

「だが神のお導きによってアイツは捕らわれた  
薄明かりのランタンを手にマッチで火を点けようとした<sup>とが</sup>咎で。  
やったぜ、野郎ども、やったぜ、鐘を鳴らすんだ、  
やったぜ、野郎ども、やったぜ、王に神のご加護を。

「教皇さまには2ペンスの安物のパンをお召し上がりいただく  
そこに1ペニー分ちよいとチーズを口に含めば喉につかえるだろうよ  
そしたらビールを1杯、1パイント、飲んですべてを流し込め  
それからアイツを焼き殺すために薪を山と積み上げる  
ヤツの身体を頭から焼いていくのさ  
そしてオレたち、あの悪党ついにくたばりやがったって眩くのさ。

「それ、それ、それ、やったぜ！」\*<sup>3</sup>。

訳注\*3 “Remember, remember the fifth of November” で始まるこの韻文は、周知の通り最もよく知られる nursery rhyme のひとつである。現存するものには様々な版があり、特にここに示されるような反カトリック感情を煽る可能性のある箇所については変更されているものが多いが、現在でもこの伝統行事を非常に大切なものとして継承しているルイスの Bonfire Society のなかには、このように古くからの韻文をそのままに唱える団体もある。但し、以下の Rottingdean に関する20世紀初頭の回想にも記されている通り、いわゆる宗教色は極めて薄く、あくまでも伝統を重んじた催しという扱いで、先人への敬意を優先した選択であると思われる。因みに、

火葉の樽の数もこの版では four-score とだいぶ誇張されている。多くの版では 3 scores (=60) であるが、実際の樽数は 36 (= 3 dozens) というのが有力な説とされる。

その夜、村の通りは、おどおどしては近づけないほどの賑わいでした。ハイ・ストリートの手前の端と海岸線の大通りが交差するところの真ん中には、すでに大きな篝火かがりびを焚く支度が調えられていました。お騒がせのこの隊列は、まさにここへ向かっていたのでした。手にしたトーチの炎で火を点し、揺らめく炎の明かりのなか、篝火を囲んで彼らは踊ります。踊りながらも、あの反カトリック的な韻文の詠唱が、宗教的信念とはまるで無縁といった風で、寧ろ機械的に何度も繰り返されていました。

父は以前、どのようにして大きな篝火を組んだか話してくれたことがありましたが、ある年には、前浜で拾ってきた流木を集めたのだそうです。流木には、難破した小型船の竜骨や船底の板なども含まれていて、これらはすべてタールで塗装されていましたから、篝火のなかで、ものすごく大きな炎を巻き上げました。[訳者補記 篝火の炎を管理する] 火夫長を任されていた村駐在の警察官、ウィルズ巡査は、夜も更けて燃料が底をついてくると、少年たちにもっと薪を探して持って来るよう指示しました。「もっと焚かなきゃならねえ。わかるよな、オメエら。あちこちかけずり回って、どっからでも何でも掻き集めて持って来てくれ」。少年たちは四方八方へ駆け出し、手に入れられるありとあらゆる燃えそうなものを集めました。そして彼らは、巡査の家の庭で、ベニバナインゲンを育てるのに使う細長い棒が、来年また使えるよう、すべてきれいに束ねて物置小屋に立てかけてあるのを見つけました。彼らは他のものと併せてこの棒の束を背負い、篝火のところまで運びました。かわいそうにウィルズ巡査は、気持ちが高揚していたのでしょね。その場では自分の家から運ばれたものとは気づかずに、自らの手でその棒をすべて炎のなかへ投げ込んだのでした。「よし行くぞ、オメエら」。巡査は雄叫びを上げ

ました。「もっともっと燃やし続けるんだ。燃やして燃やして、盛り上げていくぜ」。

## 【12月】

「納屋を見ればどこも満杯、畑は刈り終え、きれいさっぱり、  
地主の旦那、農夫の仲間、皆々様に幸運を。  
一段落ってところだが、今度は鋤かけ、種撒きやって  
来たる新年に備えようとしよう」。

「若き相棒 (Two Young Brethren)」

冬も本番を迎え、いよいよ霜の降りる頃になると、今度は家畜の糞を飼育場から片付けなければなりません。羊の放牧場が5つ、馬小屋と乳牛小屋が合わせて9つあり、これらすべての糞を運び出すと相当な量になるもので、私自身も、今は日時計の置かれた芝地になっていますが、[訳者補記]教会の裏手にある] テューダー・クロウズ (Tudor Close) という名の袋小路に面した牛小屋の外に、コート農場の飼育場から運ばれた、優に荷車200台分を越える糞が山積みされているのを見たことがあります。さらに、ブライトンからも肥やしが届きます。これらについては、糞が肥やしとして使われる畑へそのまま運ばれ、一カ所にまとめておかれるのが常でした。この肥やしの山は「ミクスン (mixon) [訳註] Sussex dialect」と呼ばれていました。この作業は、3台の馬車で午後の2時30分までかけて行われましたが、丘の裾野に広がる耕地などの場合は、加勢にもう3人と、積み卸しを行う馬方、それに馬を曳いて行き来する見習い小僧たちが加わることもありました。加勢に来た人たちは、一緒に昼食 (dinner) をとり、馬たちが厩舎へ戻された後も畑に留まって、その日のうちに荷車40台分の肥やしを畑に拡げて均さなければなりませんでした。

まあ、この冬の最中<sup>さなか</sup>の肥やり<sup>こえ</sup>ってのは、手間も時間もかかったもんだが、とにかく何エーカーもの畑<sup>かきわ</sup>に栄養をもたらず、この香<sup>か</sup>しい肥やし (beautiful stuff) を均<sup>ひら</sup>していったのよ。

なかには、出来高払いでこの肥やりの作業に従事する人もいました。ある日、父は、物置のなかで祖父の事務所へ連なる列に並んで、仲間たちと一緒に順番を待っていました。給金を受け取るためです。父はいくらか時間外の仕事をこなしていたようですが、自分の番になって給金を受け取ると、正規の週給きっかりしか渡されませんでした。金額を見てしばらく立ち尽くしていると、祖父が言いました。「さっさと行けよ、オメエ。なに、ポーっと突っ立ってやがる」。

「親父よお、今週はだいぶ時間長めに働いたんだぜ。マナンメア (Man and Mare) [訳注<sup>こえ</sup>畑の名称] の肥まき」。

「オレにその分の金払えって言ってんのか？ん？」。

「ああ、オレたちやらずって考えてたんだ」と父は返しました。「あんだけしんどい作業なんだから、1エーカーやりゃ3シリングにはなるだろうってな」。

「週が明けたらまた来な」と祖父は言いました。

月曜日の朝、祖父は父を呼んでこう言いました。「マナンメアまで行って、オメエらが播くことになってる肥やしを見てきたよ。で、考えてみたんだが、今度やるときゃよ、1エーカーにつき2シリング9ペンス払ってやるよ」。

この話を私にすると、父はじっと考え込んでこう言いました。「親父を言いくるめるのは簡単じゃねえってことよ」。

この頃になると、少しずつクリスマス気分が漂い始めていました。何週間も前から台所の片隅では銅鍋でプディングが茹でられていましたし、夕方になると、少年たちは [訳者補記 ハイ・ストリート沿いのパブ]、ブラック・ホー

スに集まり、ハンドベルの演奏や「ママーズ・プレイ (Mummer's Play) [<sup>訳</sup>呼称に拘わらず台詞のあるコミカルな寸劇で、伝統的にクリスマスの時期に演じられる。]」の練習を始めていました。クリスマスを控えた前の週には、ハンドベルとママーズを携えて、彼らは村の大きな邸宅を一軒ずつ代わる代わる訪れました。何れのお宅も彼らを歓迎してくれ、ワインやビール、お菓子といった数々のクリスマスのご馳走が振る舞われました。ある日の夜、一行はフィリップス大佐のお招きを受けていました。お住まいのある「ヒルサイド」では、大佐がご家族やご友人らとともに、彼らの到着をお待ちになっていました。邸宅を目指し、一行は、ハイ・ストリートを上手の方へ歩いておりましたが、その夜、先にお邪魔したお宅でパンチ・ボウルを囲んでたらふくお酒をいただいていたせいで、皆随分と饒舌になっておりました。そして、<sup>[訳者補記]</sup>Black Horse を過ぎて数軒北の西角にあたる]リーディング・ルーム・コーナーに差し掛かった辺りで、ファーザー・クリスマス <sup>[訳注 = Santa Claus. イギリスの伝統的な呼称。Mummers では通常進行役を務める。]</sup>と、ブラック・ジャック <sup>[訳注 Mummers の登場人物のひとり。因みに劇中で戦うのは通常 St George と Turkish Knight である。]</sup>が、激しく口論を始めてしまいました。数ヤード進んだところで、ついにファーザー・クリスマスが、手にした柵の枝でブラック・ジャックの後頭部に一撃を食らわしました。するとジャックも、このときばかりはクリスマスに寄せられた「平和と友好を」という神のお言葉を失念し、カバノキの箒で応酬します。二人は「あたかも二匹の雄ネコのように殴り合い」しましたが、程なく引き離され、予定通りに目的地を目指すよう説き伏せられました。フィリップス大佐のお宅に到着し、居間に通されると、まだまるで冷静さを取り戻せていなかったファーザー・クリスマスは、なんとドアを入るなりケンカ腰の口調で、「さあさあ、お馴染みファーザー・クリスマスのお出ましでえ。歓迎してもらえますかな？」と声を張り上げてしまいました。すると、部屋の明かりが、何とも無残なファーザー・クリスマスの姿を照らし出しました。脱脂綿で作った白髭は片耳から

垂れ下がって完全に斜めに傾き、また、ファーザー・クリスマスの象徴とも言える柵の枝は折れ、葉もわずか1、2枚しか残っていません。ブラック・ジャックにもまた喧嘩の痕跡が残されていました。鼻から少し出血していましたし、手にしたカバノキの箒には枝が2、3本のみという有様でした。それでも演じ手たちは何とか劇をやり通し、観客もまた、演目に少々似つかわしくない風体については、この時節の雰囲気のお陰か、どうやら大目に見てくださったようでした。ジョッキにビールが注がれ、デカンタ入りのワインが一通り振る舞われると、劇はお馴染みの顛末にて幕を閉じます。待ちに待った休暇を前に、皆々様のご多幸を念じつつ、仲良く家路についたのです。

クリスマスの日には、祖父の暮らすノースゲイト 〔訳註〕チャルナーズ農場の北の田舎家に家族全員で集うのが恒例でした。一族の大半はこの村に暮らしていましたが、それでも全員が一堂に会する機会はあまりなく、一年のうちクリスマスが唯一といっても過言ではありませんでした。但し、ひとりだけ例外がおりました。ハイ・ストリートのすぐ外れに暮らす父の叔父です。この大叔父はあまり社交的な人物ではなく、夜はブラックホースのバーの長椅子に腰掛け、ピア・ジョッキ片手にパイプを吹かしている方が性に合っているようでした。父に言わせると「変わり者」だったそうで、いつもスモックを着ていましたから、父は「スモックの下に何を着てんのか、神様はお見通しだろうよ。ボロに決まってらぁ」などと少々皮肉っぽく話していました。また、大叔父は同世代の多くの人たちと同じように嗜みタバコを愛用していました。父曰く、「うちには来たくなかったのさ。暖炉につばを吐くなって親父にガミガミ言われるからよ。それに何よりな」と、冷ややかに父は続けました。「歌えねえんだよ、叔父貴のヤツ」。

農場を統括する村の重鎮であった私の祖父は、一年中いつでもご馳走を食べていましたが、クリスマスにはさらにお酒と料理が増え、その重みでテーブルがきしむほどでした。毎年「一度肉を切り分けて貰っても、またおかわりが出来る」くらい大きな、重さが25ポンドはありそうな七面鳥が用意され

ていましたし、クリスマスの贈り物として、農場主の方が地元産の牛のもも肉16ポンド分を届けてくださいました。この二つだけでも大きすぎて祖父の田舎家のオーブンで調理することは出来ませんでしたから、息子たちがオールワークス (Allwork's) という名のパン屋まで運んで行って焼いて貰わなければなりません。このパン屋は、毎年クリスマスの朝には、こうして肉を焼くために特別にオーブンに火を入れてくれていました。

お昼頃には、祖父の小さな田舎家は人で溢れかえらんばかりになっていました。伯／叔母たち、伯／叔父たち、いとこ、はとこに、伯／叔母たちの兄弟、伯／叔父たちの姉妹等々、如何に遠かろうが、この家と血縁にあるありとあらゆる世代の人々がそこには集っていました。星形の葉をつけた長いツタの蔓が花綱のように食器棚に飾られ、壁に掛かった絵の裏からは柵の小枝が伸びていました。この特別な日の雰囲気を出すためか、祖父はいつも独特のしゃれたチョッキを身に纏っていました。その前面には、赤と緑で編み込まれた布が<sup>しつら</sup>設えてあり、垂直方向には小さな丸ボタンで猫の目のようなかたち<sup>しつら</sup>に曲線が2本描かれ、水平方向には、懐中時計に連なる金の鎖、「アルバート」・チェーンが2本、チョッキの真ん中辺りのボタンからその両脇にある祖父の頑丈なおなかの上の2つのポケットへ、各々曲線を描きながら延びていました。家族のこと、村のこと、何れも取るに足らない内容ではあったでしょうけれど、シェリーや「ホット・トディ (hot toddy)」<sup>[訳注]</sup>ウイスキー、ブランデー、ラムなどに、ハチミツや砂糖、レモンを加えお湯で溶いた飲料]のグラスを傾け、葉巻を吹かしてゆっくり味わい、煙を<sup>くゆ</sup>燻らせながら、会話は随分と弾みました。

1時頃になると、息子たちは鳥が焼き上がったかどうか確かめるためパン屋へと出かけて行きます。何しろ大きな鳥でしたから、七面鳥はいつもオーブンの一番奥から最後に取り出されました。たいへん都合の良いことに、このパン屋はブラックホースの裏口から手を伸ばせば届くくらいすぐそばにありましたので、息子たちは、パン屋の主が大声で呼んでくれるまで、このパ

ブのバーで待っていました。呼ばれるまでの間に、大方トミー叔父さんの作った度数の高いクリスマス・エールをグラスで2、3杯は飲み干していたことでしょう。これは酔いの回る美味しいビールで、父の話では、「コイツを何杯かやってから牛肉と七面鳥を家に運んで帰ってえのは、なかなかの大仕事よ。肉汁を落とさねえように、ところどころ、すんげえ (middlin') [訳註 = middling = very much (Sussex dialect)] 小股で歩かなきゃならなかった」のだそうです。

水を一わが家の場合は池の水を一 [訳者補記 イエス様のように] ワインとは行きませんでした。ビールに変える術を身につけていたという点で、祖父は幸運でした。毎週、あちこちの醸造業者が、蒸気機関で駆動する [訳者補記 トラックのような荷台付の] 車で祖父の管理する農場の池へ水を汲みにやってきましたが、これを許可する返礼を祖父は現物で受け取っていました。そのうちのある醸造業者からは、一年を通じて定期的にマイルド・ビール [訳註 苦みの少ない黒ビール] が樽で届き、これはいつも家の階段の下に置かれた戸棚のなかに台座に乗せられタップを付けて置かれていました。クリスマスの時期になるといつも、XXXX エールの樽と、女性向けにダブル・スタウト [訳註 苦みの少ないチョコレートやコーヒー、それにブラックベリーのような果実のような豊かな香りを特長とする黒ビール] の樽がさらに加わりました。

また、別の業者からは、特別に醸造したクリスマス・エールが届きました。「おったまげるぜ (Dan'l) [訳註 = Dannel or Dang = Damn (Sussex dialect)]。もう感動もんで目ん玉飛び出しちまうぐらいさ。」と父は話していました。「ルバブ (rhubub) ・ワイン [訳註 = rhubarb wine. 刻んだルバブに大量の砂糖を加え、ワイン酵母を用いて醸造する甘くて香りの良い酒] みてえな感じだったな。ウメえんだ」。

祖父は、良く響く低い声で、いつもよりゆっくりとお祈りを捧げます。その口調は、テーブルをしならせているたくさんの料理の重量感とも折り重なるように、言葉ひとつひとつに重みと深みを纏わせていました。

「神様、これからいただくものへ心より感謝を申し上げます」。

毎年、クリスマス日の食事時は、普段とはまるで雰囲気の違うもので、食事と言うよりむしろ儀式の時間のような感じでした。クリスマスの日ですから、当然食卓は豪華絢爛です。皆わかっていたことです。食卓には、砂糖衣に包まれた巨大なケーキや、甘い良い香りで食欲をそそるサンドイッチ [註<sup>㉑</sup> Victoria sandwich のような、スポンジ・ケーキにジャムを挟んで粉砂糖を振った菓子の類い]、チョコレート・ビスケットに、クリーム菓子、自家製のミンス・パイ [註<sup>㉒</sup> 伝統的にクリスマスの時期に食べるドライ・フルーツ入りのタルト] などが並んでいます。なのに、なかなかこのご馳走に手が伸びません。唯々満腹で、お腹に入らないのです。

ティーカップがどんどん空になっていく一方で、山盛りの食べ物ほぼ手つかずの状態でした。クリスマス・ケーキは言わば儀礼的につつかれ、かじられてはいましたが、問題はミンス・パイでした。かつてミンス・パイは、1つ食べるごとに新年の各月が幸運に恵まれると言われていました。だいたい1月の分から4月、5月くらいまではおいしく順調に食べ進められましたが、夏の盛りに差し掛かると雲行きが怪しくなり、8月、9月ともなると、ベルトを緩めズボンの上のボタンを外しても諦め気味の戦いとなって、残りの月の分については、一か八かしぶしぶ挑むような格好になるものでした。

食事の時間が終わり、「喉を潤す (wet their whistles)」べくジョッキにビールが注がれ、皆に振る舞われると、暖炉の片側に置かれた肘掛け椅子に腰を下ろした祖父は、暖炉の反対側に座っているトム叔父さんに厳めしく頷いて合図を送ると、直ぐさま一曲目のキャロルを歌い始めます。すると、伯／叔父たち、伯／叔母たち、兄弟姉妹に、いとこたち全員が、わが家特有のハーモニーやヴァリエーションを付しながらこれに加わりましたから、その歌声で、祖父の小さな田舎家はぐらぐらと揺れていました。キャロルを何曲か歌った後は、クリスマスの賛美歌が次から次へと歌われ、気取りのない賛美を唱えながらも高まっていく、素朴で飾り気のない歌声には、クリスマス

の夜に今年もまたこうして集うことの出来た、家族みんなの喜びと感謝の祈りが表れていました。

「羊飼いたちよ立ち上がれ、怖れることはない、急ぎ向かうのだ  
 ダビデの町へ、この世に姿を現されたのだ\*<sup>4</sup>、  
 あの祝福されし幼子とともに、彼の地の祝福されし幼子とともに、  
 彼の地の祝福されし幼子とともに、彼の地の祝福されし幼子とともに。  
 歌え、歌え、この世のすべての者たちよ、  
 歌え、この世のすべての者たちよ、歌え、永久とこしえの賛美を  
 私たちの救い主のために、私たちの救い主とご在天の神のために」\*<sup>5</sup>。

<sup>訳注</sup>\*<sup>4</sup> Bob の祖父の書き残した歌詞に ‘sin on earth’ とあり、その音で歌い継いで来たようであるが、意味上は ‘sent on earth’ と了解されている。

<sup>訳注</sup>\*<sup>5</sup> 「羊飼いたちよ立ち上がれ (Shepherds Arise)」の一節。Copper family が代々歌い継ぐ Christmas carol のひとつ。

こうして、夜の前半は宗教音楽の歌唱に費やされました。父はこんな風に振り返ります。「9時になるころにゃ、ビールはもうたくさんって気分になることもあったが、強え酒つえが欲しくても椅子に腰掛けてじっと待ってなきゃならねえ。親父が9時半までは、ワインやら蒸留酒を飲むのを許してくれなかったからな」。それくらいの時間になると、頭に入っているクリスマス音楽はほぼ歌い尽くされ、いよいよ「懐かしい歌」の数々がこれに続きましたので、祖父の家の表には、通りすがりに立ち止まり暫し歌声に耳を傾ける人たちもいたようです。ブラッサー (Brasser) [<sup>訳者補記</sup> Bob の祖父の通称] 一家は、今年もまた変わらず伝統的なかたちでクリスマスを祝っていたのでした。

11時になると、歌を一旦止めて夕食 (supper) を取りました。最初に食卓に現れたのは12ポンドのハムで、これは毎年、農場主の奥様が祖母にくださるものでした。お次は牛もも肉、そして、おそらく皆の大好物であった、

冷製の美味しい骨抜きラビット・パイ。これは、脇腹肉のベーコンと固ゆで卵と一緒にゼリーで固めたもので、パイ皿に入り切れない大きさになりそうなどときには、祖母は2つに分けて焼いてくれました。ハムと牛肉を切り分けるのは祖父の役目でした。全員の皿が一杯になると、祖父は腰を下ろし、歌い始めます。

「ねえ、もう忘れちゃったかな、ずっとずっと昔の  
名も知れぬ二人の幼子の話、  
ある晴れた夏の日、道に迷って、  
あの二人の幼子は帰れなくなってしまったこと。  
森にはぐれた愛らしい子どもたち、森のなかのかわいい子どもたち、  
ねえ、もう忘れちゃったかな、森のなかのあの子どもたちのこと」\*3。

訳注\*3 「森にはぐれし幼子たち (Babes in the Wood)」の一節。  
Copper family のクリスマスの定番曲。

この歌は、毎年クリスマスの日の夜も更けた夕食の時に、唄うことと食べることが交互に入れ替わる、すなわち歌と食事を同時に続けるという面白いやり方で唄われました。歌はバドミンソンのシャトルのように、<sup>〔訳者補記〕</sup>向かい合って座った] テーブルの片側から反対側へと繰り返し移動します。およそ半数の人が、料理を突き刺したフォークを自分の前に持ち上げた状態で最初の2行を歌います。その間、残りの半分の人たちは次の2行が始まるまでの間にラビット・パイをロ一杯に頬張って大急ぎで食べます。そして仕上げは、全員が食べ物を飲み込んだ状態で <sup>〔訳者補記〕</sup>5行目からの] コーラス部分を合唱するという具合です。消化に良くないのではないかと、どうしても考えてしまいますよね。その点で言うと、この歌が3番までしかないのは幸いでした。

毎年ボクシング・デイの朝には、地主のステニング・ピアドさんのお住まいであるダウン・ハウスの向かいの広場 <sup>〔訳注〕</sup>教会前の村の広場] で、ブルク

サイド・ハリアーズの会合がありました。午前11時きっかりに、祖父はとても度数の高いジンを一<sup>おお</sup>杯呷ると、琥珀の持ち手の付いた海泡石製のパイプ煙草に火を点け、「ヨロヨロ歩いて (doddle) [訳注Sussex dialect] 寄り合いに出かけて」行きました。出陣の盃が一巡し、ビールのジョッキが手渡されたら、いよいよ狩りの始まりです。最初の獲物の隠れ家へと向かいます。彼らには頼りにしている羊飼いがいました。この人物は丘に棲む野生の生き物たちのことを熟知していて、どこへ行けば野ウサギがいそうか教えてくれましたので、そのお礼として4シリングが支払われていました。

狩りを終えた面々は、大抵午後4時頃戻って来ます。昼食 (dinner) を取ってしばらくくつろいだ後、祖父と大叔父のトミー、[訳者補記叔父の] ジョンと[訳者補記私の父] ジムは、4人でダウン・ハウスへ出向き、庭の芝生の上に立ってキャロルを歌い始めます。父の話ですと、「だいたい簡単な歌から始めるもんだった。みんな前の晩にスティンガー (stinger) [訳注ウィスキーのソーダ割り] をちいとばかし飲んでたもんでよ。ほぼほぼ二日酔い気味 (ornery) [訳注= unwell (Sussex dialect)] だった」のだそうです。3番の歌詞に差し掛かる頃、ステニング・ピアドさんが扉を開けて、「なかへお入り、ジム。さあ、トミーも、みんな中へ入って、いい狩りの歌を聴かせておくれ。そういうのは日曜の朝、教会へ行けば聴けるんだから。」と声をかけてくださったようです。中へ入ると、奥の暖炉で長い丸太の炎がゆらゆらと燃え盛っていて、品の良い紳士のお仲間が狩猟用の服装のまま、これを取り囲むように腰掛けておられました。テーブルの上には、熱々の「ボウルに入った、とんでもなくうめえ (damn gurt) パンチ」が置かれていました。旦那様はおたまでこれをすくうと、「さあ、パンチを少し飲んでから唄っておくれ。おなが空いては唄えないだろう」。かくして4人は、古くから歌い継がれたありとあらゆる狩りの歌と、そのほかたくさんさんの歌を唄い、夜は更けていくのでした。

「名士の皆様、お耳を拝借、  
何れ劣らぬ有能な獵犬を率いる狐狩りをこよなく愛す皆様。  
あなた様には耳寄りの、とある狐のお話です。  
オクスフォードシャーのオクスフォードの町に、  
優秀な獵犬たちがおりました」\*4。

訳注\*4 「名士の方々 (Gentlemen of High Renown)」の一節。Copper family の代々歌い継ぐレパトリーのひとつ。口頭伝承故に、冒頭など ‘Gentlemen of hiring hounds’ と唄われていた時期もあった (The Copper Family, *Song Book: A Living Tradition*, Coppersongs, 1995, p.37 参照)。

こうしてまた一年が一巡りしました。羊の出産期に始まり、干し草作りを経て日の長い6月の暑い最中の羊毛刈り、そして収穫、さらには肥やし播きの薄暗い12月の日々と、季節毎にこなさなければならない作業があり、その仕事に明け暮れる辛い日々が巡って来ました。でも忘れてはいけません。こうした数多の仕事に心配の種がつきものであるのと同じように、どの季節にも歌があり、そしていつでもこれを唄う逞しい心と元気一杯の声がありました。

謝辞

ここまで12ヶ月分の翻訳に際しては、Jon Dudley 氏をはじめ Copper family の方々、また Lewes のフォーククラブの皆様によくをご教示いただいた。あらためて心より感謝申し上げます。